

# 北大西洋海域史から見る アボリショニズム研究への射程

——西インドにおける奴隷解放の祝祭 8月1日祭を中心に——

田 中 きく代

は じ め に

アメリカ合衆国において、奴隷解放を祝う祝祭は数多くある。その一例を挙げると、1808年の奴隷貿易廃止の施行を記念する1月1日祭がある。また、北部の諸州での奴隷制廃止を祝うものでは、1783年のマサチューセッツ州の7月17日祭、1827年のニューヨーク州の7月5日祭などがある。もちろん南北戦争中の奴隷解放に関するものでは、奴隷解放宣言や予備宣言を祝うもう一つの1月1日祭や、独立記念日と合わせた7月4日祭がある。南北戦争の最中でも、北軍が掌握した地で奴隷制が廃止されたので、地域による奴隷制廃止の記念日もある。さらに、現在広く祝われているものでは、リンカーンの奴隷解放宣言がテキサスに届いた1865年の6月19日を記念するJuneteenthがある。

こうした中で、1833年8月1日にイギリス議会で可決され、1年後の8月1日に施行された、イギリス領西インドでの奴隷解放を記念する祝祭である8月1日祭（August First）は、環大西洋におけるアボリショニズム（奴隷制即時廃止主義）に多大な影響を与えたという点で、アメリカ合衆国史上でも特異な祝祭である。現在、歴史家には、合衆国のアボリショニズムを再考するという課題が課せられているが、合衆国一国にとどまらず、少なくともヨーロッパ、北アメリカ、カリブ地域という北大西洋海域の枠組の中で、アボリショニ

ズムを捉えなおすことは有益であろう。

本論では、このイギリス領の奴隷解放を祝う8月1日祭を中心にアボリシヨニズム研究の整理をし、北大西洋海域におけるヨーロッパ・北米・カリブ海を結ぶトランスナショナルな情報の伝播による相互関係について検証することで合衆国のアボリシヨニズム研究の課題と展望を示したい [Keer-Ritchie]。大西洋海域史研究では、大西洋を全体として捉えるベイリーンの *Atlantic History* をはじめとして [Bailyn]、レディカーの *The Many-Headed Hydra* など一連の著作で、「海民」の存在、また彼ら彼女らによる情報の広がりに関心が持たれてきた [Rediker 1987, 2001]。カバントーやクラインらの著作も刺激的であった [Cabantous, Klein and Mackenthun]。本論は、広くは、こうした大西洋海域史に貢献することをも意図している。

情報を伝達するということでは、筆者は「海のリテラシー」という概念を提示している [田中きく代, 2016]。それは、「「海民」が情報を入力し、理解し、活用し、発信する能力のこと」と定義できるが、それに関連する複数のテキストと、それを成り立たせた文化共同体に注目される [Stock, Fish]。アボリシヨニズムに関しても、こうした大西洋の奴隷解放に関する共通の複数のテキストと各地の文化共同体とを措定し、北大西洋に広がった奴隷制廃止の複雑に織りなされた有機的諸関係を捉えることができるのではないかと考えている。

## I 祝祭研究

まずは、アメリカ合衆国における19世紀に関する祝祭研究の動向を押さえておきたい。18世紀末から20世紀の初頭までのアメリカ合衆国を概観するとき、特に19世紀初めから19世紀末まで、様々な機会をとらえて、一般の人々を動員する大規模な公的祝祭がなされたことが特筆される [Bodnar, MacNamara]。一般の年中行事的なもの、宗教的な祭事はもちろんのこと、市町村の起源を祭るものから、重要な歴史的事件を記憶し記録する祭り、要人

の来訪の記念日、要人の葬送の日などを含めて、ありとあらゆる機会に公的祝祭が催された。ニューヨークの場合を例示すると、1788年の憲法記念日や1789年のワシントン大統領の就任から始まって、1907年のハドソン・フルトン祭に至る期間にあたるが、マクナマラは、独立記念日、イギリス人追放記念日といった革命の記念日、ジャクソン大統領をはじめとする大統領や政治家、ラファイエット、ディケンズ、コッシュートなど著名な外国人の歓迎祝典、ヘンリー・クレイやリンカーン大統領の葬式、アラモ砦の戦いなど歴史的記念日、エリー運河、クロトン水道、大西洋横断ケーブル、ブルックリン橋の開通など大土木工事の祭典が催されたとしている [MacNamara]。

こうした公的祝祭は、男子普通選挙法の施行とあいまって、一般の市民層の政治参加を促し、「参加的民主主義の黄金時代」を作り出したと評価される [Gienapp]。公的祝祭は人々が政治に参加する場としての政治空間でもあったのである。人々は祝祭を通して自らの市民としての自己主張をなした。つまり、当時の祝祭は、民衆自決による19世紀的な民主主義の生成と深くかかわっており、人々に公衆としての特性である *civic virtues* を涵養し、市民として国家や社会とかかわっていく政治参加の機会を与えた。指導者は一般の人々に訴えることで、自らの正統性を保持し、紐帯の絆を紡いでいくことができた。

また、他方で、祝祭は見世物的な娯楽の時でもあった [Altschuler, 1998, 2000]。地域の権力者が、振る舞いや娯楽を提供することで人集めをし、そのイデオロギー的主張を共通の経験として一般の人々に記憶させ彼ら彼女らから支持を得ることで、指導者たちは権力を得ることができた。

現在の研究では、こうした祝祭を中心とする19世紀の政治の両面を包摂する概念として、祝賀政治とみなす見解が周知されつつある [Persly, 田中2007]。祝賀政治の時代の祝賀のメインイベントは、成人男子の選挙の日も重要な日であったが、その時代の社会を映し出す老若男女をすべて集合させる大スペクタクルであるパレードであった。1820年代ごろから、1880年代ぐらいまでは、一般の白人男子は少なくとも自らの市民権を誇示して大路をパレード

して歩くことができたし [Ryan, Newman, Waldstreicher], 一般の白人女性は政治的市民権を持たなくても社会的市民権を有していたので [Cott], 祝祭の準備をしたり晩餐会では男性と同じくそれに参加したりした。

ただ、ここで注目すべきは、祝賀政治の時代には、観衆として大路に連なるパレードを見ていた多くのマイノリティの人々がいたことである。マイノリティの人々のパレードを歩く人々への複雑な視線は憧憬と敵対心などの入り混じった両義的なものであったろう。しかしマイノリティの男性もまた、エスニック集団ごとの祝事ではパレードという自己主張の方法を採用し、自らの集団の紐帯のために、自らの集団の過去を紡ぎだし、その存在を主張する行為を行っていたことである。

黒人の場合も厳しい妨害のために実施は容易ではなかったが、折に触れて、都市の大路を歩いて自己主張をしている [Kachun]。例えば、ホワイトが “It was a Proud Day” で詳述しているように、ニューヨーク州で奴隷制が廃止された 1827 年には、独立時に法で定められた解放という自由の約束を実際に確保するために、黒人コミュニティはパレードで一般の人々に自らを示すことで、それを可能としようとしている。黒人コミュニティは、それを 7 月 4 日という独立記念日にするか、翌日にするかで二つに分かれたが——結果的には 7 月 5 日にパレードをしている——パレードという手段をとることで一致していたのである [White]。

19 世紀中ごろになると、市民の中でも上層階級は歩かなくなり「権力を不可視化して」二階の特等席からパレードを見る存在になり、衰退傾向にあった職人たちの歩く機会は減っていくが、代わりに新たに到来した移民や改革運動の人びとがパレードに加わるようになる。しかし、歩く人々の主体は変化しても、大路という公道は、デーヴィスが言うように、一般に身をさらすことで自己主張をするというコミュニケーションの方法を実践する場であったのである [Davis]。ここで取り扱う、アボリシヨニズムも、白人主体、黒人主体、混合のものにしる、その進展とともにあらゆる記念日を利用して大路を歩く手法を取っている [Ryan, Quarles]。

このように、アメリカの祝祭を通して見える特徴は、パレードという公的祝祭を通して作り上げられていった新しい秩序が、国民形成が加速される中、より多層的な公共圏の諸相を作り出したこと、それらはそれぞれの独自性を主張しながら、相互に影響しあっていたことにある。19世紀初頭から顕著になるが、アメリカ社会が西漸運動を受けて、ジェントリの共同体から社会的コミュニティへの変動していったことや、大多数で継続して到来する移民の参加によって常に拡大していく流動性を要していたことも特徴である。祝祭を通して、「国民化」を促進し国家統合を促進させる装置が働いたのであるが、この時代は常に人々を国家や社会に参加させ同化させ続けざるを得なかったので、支配的な公共圏からマイノリティの公共圏まで、様々な公共圏が層をなして現出することになったのである。

## Ⅱ カリブ海地域の8月1日の祭り

西インドのイギリス領植民地の解放については、先行研究は数少ないが、ホールらの *Emancipation and the Remaking of the British Imperial World* [Hall, Draper, McClelland]、ウィリアムズの *A Narratives of Events* などは優れた研究書である [Williams]。それらの先行研究によると、西インドの奴隷解放とは、イギリス政府が、農園主に二千万ポンドの保障金を払い、しかも結果的には4年になったが、6年の徒弟制という過渡期を経ての完全解放という漸次的解放であった。黒人の割合の多いアンギラとバミューダなどの小さな植民地では、即時解放が採用されたが、ジャマイカなどの主要植民地では、年季奉公人という徒弟制への移行であったのである。

この西インドの解放の祭りについては、1834年7月31日の夜から、漸次解放を待つ人々が教会の周りに集まり、12時が鳴ると自然と喜びの喝さいが起こり、8月の1日の祭が始まったとされるが、合衆国にはどのように伝えられたのか。この祝祭については、アメリカ合衆国のアポリシヨニストが1840年代に演説の中で常に強調していて、それがテキストとなり出版されている。

例えばジョン・ジェイが1842年にニューヨークでなした“Progress and Results of the English West Indies”演説では、「オーヴァージアーたちによる多少の騒動はあったが、それ以外は平穏であった。教会では祈りがささげられ、多くの場所で黒人による行列が実施された。泥酔したものもいなかったし、地主から晩餐が新たな徒弟たちにふるまわれた場合も多かった。次の日曜日にも、同様に教会に人々が集まった」と、平和に遂行されたことを強調している「Jay」。また、エマソンはコンコードでの1844年の8月1日祭でも、演説の最初に解放の日に触れて、「8月1日に、多くの黒人が集まり、牧師や宣教師によって、彼ら彼女らに自由の意味、新しい諸関係や義務などが教えられた。神の御心で子どもたちは自由になると宣言された。人々は喜び合い、握手し、心からの喜びを分け合った。Grace Hillでは、千人の人が集まり、会場に入りきれず、騒ぎが生じるほどであった。Grace Bayでは、黒人たちが白の衣装を着て互いに腕を組みあってチャペルまで行列した。島中で、夜も昼も喜びのダンスが踊られた。次の月曜日の朝には、皆が農場に集まり、地主と交渉することになった」と述べている[Emerson]。

これらの演説で特筆すべき点は、「神の意思」が随所で強調されていることと、「行列」への言及があることである。現在に残る8月1日の行列は、バハマでは地域のJunkanoo、トリニダード・トバゴではCanboulay、バルバドスではCrop Over (Harvest Home) といった祝祭の行列と類似しているものの、当時の行列の形態がいかなるものかはわからない。しかし、音楽、踊り、服装に特徴があることは明示されており、パレードではないにしても、集団の自己表現の方法としてはパレードと類似性があることが合衆国の聴衆に示されている。

さらに、エマソンは漸次的奴隷解放の有り様についても、比較的詳細に触れている。それらをまとめてみると、1833年に100万の請願があったこと、1833年5月14日、スタンレイ卿が、議会で受け入れられるように漸次的廃止奴隷制廃止法案を提示したこと。その内容は、奴隷は自由人の特権を得るが、ある期間ある条件で労働を課せられるもので、土地付きの農業徒弟は6

年間、土地なしは4年間、地主に収穫の4分の3を差出し、4分の1を自分のものとして売却できる。期間が終わると自由を得られることである [Emerson]。

ところで、こうした解放の情報は、即座にカリブ海地域のみならず、大西洋の各地に広がった。海の情報の伝播には、「海民」、すなわち船乗り、商人、漁民、特に黒人の船乗りたちが貢献しており、寄港地で新聞記事や、居酒屋での yarn (噂話) で情報を伝えたことが指摘されるが [笠井]、解放の日の情報もこうした「海民」によって北大西洋の各地域に次第に伝えられたと言えるが、具体的な検証はまださほど進んでいない。今後の課題が残るところである。ここでは、もう一つの伝播の主体であった即時論者同士の交流の状況を見ておきたい。

西インドでの奴隷制廃止が決定されると、それに刺激されたアメリカのアポリシヨニストは、アメリカでの奴隷制即時廃止を求めて、イギリスの議会を動かそうとイギリスの同志たちに協力を求めた。当初は西インドに出向こうというよりも、むしろイギリス議会の支援を得て、アメリカの奴隷制廃止を進めることに主眼があったといえる。「王政のイギリスで廃止されているのに、なぜに共和国のアメリカに奴隷制があるのか」と説く戦術を取っていたので、西インドへの直接の関心はさほどなかったともいえる [Kachun]。徒弟制とはいえ解放への道が明示されたことは歓迎されたが、「奴隷的」な労働が残ることを「罪」と考える人々にはそれはもろ手を挙げて賛同するものではなかったことも大きい。

しかし、1838年に近づくにつれ、完全解放が見えてくるようになると、合衆国のアポリシヨニストは西インドの解放自体に急速に強い関心を持つようになり、西インドを視察したり、西インドの運動家を招いたりし始めるようになる。マサチューセッツ反奴隷制協会が、1837年にトーマスとキンボールを西インドに派遣していることに、特に注目されるが、彼らは6か月に亘ってアンギラ、バルバトス、ジャマイカを視察している [Thomas and Kimball]。翌年には *Emancipation in the West Indies: A Six Months Tour in An-*

*figura, Barbadoes, and Jamaica, in the year 1837* をニューヨークで出版したが、これに触発されて、合衆国と西インドのアボリショニスト同士の相互の交流が頻繁に行われるようになったのである。トーマスたちは、1834年から完全解放したアンギラを最初に訪れ、後に徒弟制が最後まで残ったジャマイカを訪れて、比較検証している。そして、解放後もプランテーションの生産が落ちなかったことや、徒弟制がもたらした様々な不正や虐待の状況、完全な解放が間近なことなどを述べているが、こうしたことが即時主義者のさらなる関心を引いたのである。エマソンは、上記の演説でも、トーマスらの視察が引き金になったと述べているし [Emerson]、他の演説者たちも、常にこれを引き金に出し、奴隷制即時廃止の実現性を強調している。

### Ⅲ アメリカ合衆国の8月1日祭

アメリカ合衆国の奴隷制廃止運動は、1816年にアメリカ植民協会が設立されたように、当初は漸次の解放を望むもので、リベリアへの植民が実施されたし、ハイチなどへの植民も模索された。しかし、第二次奴隷制とも称される南部の奴隷制の再生を機に [Tomich]、漸次主義を批判し、奴隷制度の「即時、全面、無条件」の廃止を唱えるアボリショニズムという即時廃止主義が生まれた。1831年に、ギャリソンを中心とするアボリショニストが「リベレーター（解放者）」を発行し、1833年にはアメリカ反奴隷制協会が設立された [清水]。即時主義者たちは、信仰復興運動の影響を受け、奴隷制を道徳上の問題として認識していたので、彼らは、この世に神の王国を作るべく、奴隷制度の悪に対峙し、それを消滅させる手段として「道徳的説得」の立場をとった。エマソンら多くのコンコードの超絶主義者がアボリショニズムに参加していたことが特筆される。

1840年代には、タッパン兄弟などアボリショニストの中で現実主義的な人々が袂を分かち自由党を作るが、ギャリソン派は精神的、宗教的な道徳的説得をますます推進するようになった [Kradior]。このため、従来の学説で

は、ギャリソン派の非現実性が批判され、ギャリソン派の影響力を軽視する向きもあったが、長期的スパンに立てば、彼ら彼女らの運動の影響力が根強く、アンテベラム期のリベラルな思想の根底をなしたことに留意される。ギャリソン派アボリシヨニストの一般の人々への影響力を再考するためにも、ここでは、8月1日の祝祭研究を通して、ギャリソン派の広がりをも再吟味したい。

さて、1838年に、西インドで徒弟制の廃止による完全な奴隷解放が実現すると、ジョン・ジェイによるニューヨークでの1842年の演説にみられたように、特にギャリソン派のアボリシヨニストたちに、合衆国での実現にさらなる自信を与えたようである。「西インドでの解放は即時ではなく漸次であったが、1838年に徒弟制が終わると、黒人の境遇は改善された。彼ら彼女らは結婚、教育、宗教などで自由を十分に享受している。土地を買うものも増えた」と述べられ、さらに「即時主義が奨励される証拠が西インドにあるのだ」と強調されている [Jay]。また、サミュエル・A・メイは1845年にシラキュースで、1834年の解放について演説しているが、「神の御心により、1820年イギリスのフレンズ会は、多くの女性も含めて、即時主義の請願をした。奴隷制の廃止ほど希望の持てない改革もなかったが、それがここに可能となった」と、自信をみなぎらせている [May]。漸次的解放のなされた1834年から、ギャリソン派の人びとは、合衆国の奴隷制即時廃止の実現の可能性を確信するようになっていたが、西インドにおける1838年の完全なる解放の実現は、彼ら彼女らに神の恩寵と完全なる罪の贖いの印として、さらなる自信を与えたのである。

ただ、1838年になっても、その活動は必ずしも8月1日と限らなかった。また1834年の時と同じく、合衆国での西インドの解放の祝いは、各地域の教会での神への感謝の祈りが主たるもので、そこでの説教、演説に重きが置かれていた。アボリシヨニズムの組織は各地域でかなり組織化されていたとはいえ、各地域あるいはその周辺の100人か150人が集まるといった比較的小規模のものであった。一般の人々に訴える行列も教会や市庁舎周辺の小規模の行列がほとんどであった [Kerr-Ritchie]。

しかし、アボリシヨニズムがギャリソン派と現実主義者とに分裂した1840

年ごろに転機が訪れることになる。ギャリソン派の主たる手段として、広く8月1日祭という公的祝祭を行うようになったのである。これが「アボリシヨニズムのピクニック」と呼ばれるもので、活動の中心に置かれるものとなった。転換のきっかけは、ケール・リッチーによると、ジョン・A・コリンズが「リベレイター」に載せた論説によるところが大きいという [Kerr-Ritchie]。コリンズはヴァーモント出身のマサチューセッツ反奴隷制協会のエージェントで、神学校で学んだ反教権主義者であったが、イギリス訪問の後、西インドでの成功を記念する公的祝祭を催して、合衆国に即時主義を喧伝すべきと説き、その内容を論説として「リベレイター」に載せたのである。

コリンズの論説の反響は大きく、掲載直後から、マサチューセッツ州のいたるところで、郊外の森に行き「アボリシヨニズムのピクニック」が行われるようになった。やがては東部社会の多くの地域に広げられたが、例えばマサチューセッツ州のリンのピクニックでは、3千人から5千人が集まったといわれる。これは、最も大規模な例の一つであろうが、性、人種、年齢を超えた人々が集まった。また、ケール・リッチーは、様々な新聞史料を分析して、アンテベラム期に行われたピクニックが行われた場所、演説者など確定しているが [Kerr-Ritchie]、その数の多さと地域的広がり、動員数などを分析すると、ギャリソン派の運動のすそ野の広さを特筆せざるをえない。

#### IV 「アボリシヨニズムのピクニック」

さて、ここで、8月1日祭の「アボリシヨニズムのピクニック」とは、どのように実施されたものなのか。そこでは、どうした行事がなされたのか。コリンズは、「アボリシヨニズムのピクニック」には、行列と旗、演説、音楽、晩餐がつきものであるとしている。絵画で、「アボリシヨニズムのピクニック」の様子を描いたものに、1845年スーザン・T・メリット（1826年-1879年）よるとされる、マサチューセッツのウェイマウス・ランディングの「アボリシヨニズムのピクニック」と題するものがある。絵画であるのでこれがどれほ

ど現実を描いたものかどうかは不明であるが、当時の極めて写実的な技法も考慮されるが、こうした絵画は印刷によって一般に知らせるものであったことを前提とすると、かなりの程度は実態を描いていたといえる。そこでは、信教復興運動のキャンプ・ミーティングのように、郊外の森でピクニックをし、その荘厳さの中で覚醒をしている構図が見える。森に囲まれた広場の中央には合衆国旗が掲げられ、演説に聞き入り、バザー、晚餐をする老若男女が描かれている。黒人の姿や子どもの姿も見える。一般の女性は、パレードでは行進できないが、ピクニックではバザー、晚餐の場で積極的に参加している。

女性というと、音楽の部分でも貢献している。ケール・リッチーは、音楽も当初は讃美歌が歌われていたのが、ピクニックでは讃美歌以上に新たに独自に作られた数々の奴隷制廃止の歌が重用されたというが、そうした作詞・作曲や、また歌唱でも、女性の存在が大きい。大きなオルゴールを載せたような車を引いて、いたたるところで「奴隷制廃止の歌」をがなりたてて、人気を博していた奴隷制反対のハンチンソン楽団の例を挙げるなら、この楽団には女性が作詞・作曲したり、歌ったりしているという証左がある [Fenollosa, Jeffrey]。

さて、行列は、森に行く際、あるいは帰る際に、実施されている。マサチューセッツ反奴隷制協会の、No Slavery ブロードサイドの7月4日に実施された集会の場合のように [Massachusetts Anti-Slavery]、日帰りのものでは行き帰りに車が用意されているものもある。しかし、日帰りのものの多くや、数日かけるものはほとんどの場合、行きに教会あるいは市庁舎で集合して目的地の森まで、帰りに森から出発地まで大行列をしているのである。その際は、奴隷制廃止の旗や幟が掲げられ、ブラスバンドや他の楽団が先導している。

もっとも、こうした行列がパレードの形態まで発展していたかどうかは不確かである。19世紀の新聞データベースによると、事例としては、1849年のノーフォークのものに「行進をする」という記述はあるが、そこでは **procession** (行列) と記されている。しかし、**procession** と **parade** とは、新聞記事などでは相違がなく使われている場合が多い。いずれにしろ、千人規模になると、小隊、中隊、大隊といったパレードのような秩序化を必要としたである

う。歩く順番に関してはずっと後の時代のものであるが、1875年のセントルイスの新聞記事に若干の記述があり、参考にはなる。「8月1日の行列とフェスティバル」と題するもので、後になるほど重視される序列がみえ、ユナイテッド・ブラザーズ・フレンドシップの数ロッジ、すなわち、アルトン、スパルタ、エヴァンズヴィル、カークウッドのロッジと、セントルイスのロッジが、プラスバンドに先導されて行列を形成し、午後パレードするとある。その他、飲み物や、夕方の演説者の名前なども記されている。

ところで、ここで、印刷物について述べておかなければならない。肥後本が主張するように、アンテベラム期の言論の場では印刷物の存在が不可欠であった〔肥後本〕。アンテベラムの祝賀政治では、演説が主体で、人々はそれを数時間聞き入るとというのが当時の政治参加の風景であった。政治家の演説や時には扇動は特に多くの聴衆を集めた。コミュニケーションとしての身体の露呈の中でも、声による人々との接触が大きな効果を与えた時代である。ピクニックのような改革運動の祝祭にも、説教とともに著名な人々や運動家の演説がなされた。

だが、集まった人びとのみならず、より多くの人々に伝えるには、印刷物が不可欠であった。説教、演説、音楽の楽譜などは、パンフレットとして印刷されたり、新聞に掲載されたりした。「リベレイター」のような奴隷制廃止の新聞のみならず、一般の日刊新聞であるペニー新聞にも掲載された。また、巷ではブロードサイドが至る所に貼られ、集会の案内がなされた。そこには、奴隷制廃止のスローガンや演者名、また晩餐があることが書かれていたことは言うまでもない。

つまるところ、声が文字として、画像として、楽譜として印刷され、配布され、多くの人々の朗読や演説に再利用され、歌われることが重要であった。改革運動のパンフレット類が、北部のみならず、南部にも郵送されたことはよく知られているが、こうした媒体を単なる「道徳的説得」というイデオロギーの喧伝の手段と捉えると、本質を見失いがちで、その影響力を過小評価することになる。

こうした印刷物が、それ以上に地域の活動家たちの贖罪の手段であり、それらが次のピクニックや集会、特にパレードに、より多く人々を動員する媒体となったことを考えると、その影響力は計り知れない。印刷物は、パレードの小道具になり、ピクニックで朗読され、回し読みされて、贖罪の証として再度に印刷に回されたのである。印刷物は南部への説得のみならず北部の各所で様々に拡散を繰り返す途方もない力を持っていたのである。

演説者は、宗教者、アポリシヨニズムの指導者が多いが、ギャリソン、ウェンデル・フィリップス、セオドア・ウェルド、イライジャ・ラブジョイ、ゲリット・スミスなどの男性の奴隷制廃止論者に混じって、ルクレシア・モット、グリムケ姉妹らの女性も加わっている。黒人ではジェームズ・バーベイドス、ロバート・パービス、ジェームズ・マックランメル、そしてフレデリック・ダグラスがいる。注目すべきは、エマソン、ソーローといった超絶主義者の多くは奴隷制即時廃止論者であったが、演者として再三に呼ばれていて、多くの聴衆を集めていることである [Emerson, Thoreau]。

ここで、黒人の人たちの8月1日についても述べておかなければならない。彼ら彼女らは、先述のように、白人のアポリシヨニストと一緒にピクニックにも参加している。教会を中心とする初期のアポリシヨニズムの段階から、地域の教会に所属し、運動に参加していたものも存在する。また、独自の組織を作り運動をしたものもいるが、それらもまた同じような8月1日の祝いをしている。その母体には黒人の自警団やミリシアの存在がみられると、ケール・リッチーというが、彼の指摘も団体名の指摘に終始する傾向がありその実態は定かではない [Kerr-Ritchie]。今後の研究が待たれるが、史料的に限界があるので、これには南北戦争後の Junteenth の祝祭の検証を通して遡る方が近道かもしれない。

また、黒人の集団形成や祝祭での行列に関して、植民地時代の北部で慣習化されていた black election day (negro election day) の影響が指摘されていて注目すべきである [Kachun, White]。これは、ヨーロッパからもたらされた、「収穫の王」の慣習を黒人奴隷の世界にも適応させたもので [Kachun],

黒人独自のリーダーシップや、その祝祭の形態に、南北戦争前の黒人の祝祭を彷彿させるものがあるという見解は特筆できる。

## お わ り に

8月1日祭に関する本論は、アボリシヨニズムを通して、アンテバラム期の政治文化の多彩で複層的な諸相の一面を示すことができたが、こうしたマイノリティあるいは改革運動の研究は、既存の史料がほとんど残っていない。それでリテラシーという概念を提示し、演説のテキストやアボリシヨニズムの文化共同体を措定することで、祝祭の場における研究のある一定の方向性を指摘することにした。

つまり、第一には、8月1日祭に焦点を当てることで、環大西洋史の文脈でアボリシヨニズムを捉え直すことの必要性を述べてきた。今後は、イギリス、メキシコ、カナダでのアボリシヨニズムとの相互交流についてさらに研究を進めないとならないだろう。当面は、ソーローなどコンコードの超絶主義者の著作を吟味し、合衆国のアボリシヨニストの他国のアボリシヨニストとの交流や影響に論を進めていきたいと考えている。また、第二に、アメリカのアボリシヨニズムにおいて、その広がりや投票などのハードな史料のみで捉えると、かなり限定されたものになるが、祝祭に視点を置くことで、それがより多様なより大規模な動員を可能とするものになっていたことを指摘した。

今後は、印刷物の読まれ方、すなわち使われ方を総合的に考察し、祝賀政治におけるアンテバラム期の言論の場について検証を進めないとならない。本論で演説が印刷されたものの一部を、テキストとして紹介したのは、こうした試みからでもある。

### 参考文献

Channing, William E., *Dr. Channing's last Address: Delivered at Lenox, on the First August, 1842, the Anniversary of Emancipation in the British West Indies* (Boston: Oliver Johnson, 1842).

- Emerson, Ralph Waldo *An Address Delivered in the Court House in Concord, Massachusetts on 1<sup>st</sup> August, 1844 on the Anniversary of the Emancipation of the Negroes in the British West Indies* (Boston: James Munroe and Company, 1844).
- Fenollosa, Manuel, *Emancipation Hymn: Quartette & Map; Chorus: Composed; Dedicated by Permission to the Salem Union League* (Boston: O. Diston, 1863).
- Jay, John, *The Progress and Results of the English West Indies: A Lecture Delivered before the Philomathian Society of the City of New-York* (New York: Wiley and Putnam, 1842).
- Massachusetts Anti-Slavery Society, Board of Managers, *Annual Report of the Board of Managers of the Massachusetts Anti-slavery Society with Some Account of the Annual Meeting*. (Boston: Isaac Knapp, 1836-1842. Annual 4<sup>th</sup> (Jan. 20 1836)-10<sup>th</sup> (Jan. 26, 1842)).
- , “No Slavery: Fourth of July”
- May, Samuel A., *Emancipation in the British W. Indies, August 1, 1834: An Address Delivered in the First Presbyterian Church in Syracuse, on the First of August* (Syracuse: J Barber, 1845).
- Thomas, J. A. and J. H. Kimball, *Emancipation in the West Indies: A Six Months Tour in Antigua, Barbadoes, and Jamaica, in the year 1837* (New York, 1838).
- Stanley, J. G., *An Address Delivered at Lenox, on the First of August, 1842: Anniversary of Emancipation, in the British West Indies by William E. Channing*, (Lenox, Massachusetts: 1842).
- Thoreau, Henry David *Thoreau Walden: or, the Life in the Wood*, (1854); *Civil Disobedience*, (1866); *Slavery in Massachusetts* (1854); 伊藤紹子訳『森を読む』(宝島社, 1995年)。

\**Liberator* に関しては、<http://theliberatorfiles.com> の “The Liberator Files: Boston-Based Abolitionist Newspaper, Published by William Lloyd Garrison, 1831-1865” を参照。

- Altschuler, Glenn C. and Stuart M. Blumin, *Rude Republic: Americans and their Politics in the Nineteenth Century* (Princeton UP, 2000).
- Bodnar, John, *Remaking America: Public Memory, Commemoration, and Patriotism* (Indiana, 1992).
- Burstein, Andrew, *America's Jubilee, July 4, 1826: A Generation Remembers the*

- Revolution after Fifty Years of Independence* (NY, 2001).
- Cott, Nancy, *Public Vows: A History of Marriage and the Nation* (Harvard University Press, 2002).
- G. Davis, Susan, *Parades and Power: Street Theater in Nineteenth-Century Philadelphia* (University of California Press, Berkeley, 1986).
- De Bolla, Peter, *The Fourth of July: And the Founding of America* (NY, 2007).
- Egerton, Douglas R., Alison Games, Jane G. Landers, Kris Lane, Donald R. Wright, *The Atlantic World: A History, 1400-1888* (Illinois, 2007).
- Fabre, Geneviève and Robert O'Meally, *History and Memory in African American Culture* (Oxford University Press, 1994).
- Gale, Kenny, *Contentious Liberties: American Abolitionists in Post-Emancipation Jamaica, 1834-1866* (University of Georgia Press, 2011).
- Gienapp, William E., "“Politics Seem to Enter into Everything” : Political Culture in the North, 1840-1860," in Stephen E. Maizlish and John J. Kushma (eds.), *Essays on American Politics, 1840-1860* (TX, 1982).
- Gravely, William B., "The Dialectic of Double-Consciousness in Black American Freedom Celebration, 1808-1863," *Journal of Negro History*, vol.67-4 (Winter 1982), 302-17.
- Grover, Katharine, *The Fugitive's Gibraltar: Escaping Slaves and Abolitionism in New Bedford, Massachusetts* (University of Massachusetts Press, 2001).
- Jeffrey, Julie Roy, *The Silent Army of Abolitionism: Ordinary Women in the Antislavery Movement* (North Carolina University Press, 1998).
- John, Richard D., *Spreading News: The American Postal System from Franklin to Morse* (Harvard University Press, 1995).
- Kachun, Mitch, *Festivals of Freedom: Memory and Meaning in African American Emancipation Celebrations, 1898 to 1915* (University of Massachusetts Press).
- Keer-Ritchie, J. R., *Rites of August 1: Emancipation Day in the Black Atlantic World* (Louisiana State University Press, 2007).
- Kradior, A. S., *Means and Ends in American Abolitionism: Garrison and his Critics on Strategy and Tactics* (1969).
- Kupperman, Karen Ordahl, *The Atlantic in World History* (Oxford University Press, 2012).
- Laughhran, Trish, *The Republic in Print: Print Culture in the Age of U.S. Nation Building, 1770-1870* (Columbia University Press, 2009).
- Mack, John, *The Sea: A Cultural History* (London, 2011).

- Malloy, Mary, *African Americans in the Maritime Trades: A Guide to Resources in New England* (Kendall Whaling Museum Monograph Series No.6), (MA, 1990).
- Mitchell, Thomas G., *Antislavery Politics in Antebellum and Civil War America* (Westport, 2007).
- McNamara, Brooks, *Day of Jubilee: The Great Age of Public Celebrations* (New York, 1997).
- Murphy, Angela F., *The Jerry Rescue: The Fugitive Slave Law, Northern Rights, and the American Sectional Crisis* (Oxford University Press, 2015).
- Newman, Simon P., *Parades and the Politics of the Street* (Penn UP, 1997).
- Ozouf, Mona, *la fete revolutionanaire, 1789-1799* (Gallimard, 1976).
- Quarles, Benjamin *Black Abolitionists* (Oxford University Press, 1969).
- Ryan, Mary P., "The American Parade: Representations of the Nineteenth-Century Social Order," in Linn Hunt (ed.), *The New Cultural History* (University of California Press, 1989), 131-53.
- Redford, Duncan (ed.), *Maritime History and Identity: The Sea and Culture in the Modern World* (New York, 2014).
- Sorbe, Judith Berg, *San Antonio on Parade: Six Historic Festivals* (Texas University Press, 2003).
- Steinberg, Philip E., *The Social Construction of the Ocean* (Cambridge University Press, 2001).
- Studley, Marian H., "An 'August First' in 1844," *New England Quarterly* 16 (Dec., 1943), 56-77.
- Tomich, Dalew. ed., *The Politics of the Second Slavery* (State University of New York, 2016).
- Travers, Len, *Celebrating the Fourth: Independence Day and the Rites of Nationalism in the Early Republic* (University of Massachusetts Press, 1997).
- Waldstreicher, David, *In the Midst of Perpetual Fetes: The Making of American Nationalism* (NC, 1995).
- White, Shane, "Pinkster: Afro-Dutch Syncretization in New York City and the Hudson Valley," *Journal of American Folklore*, vol.102-403 (Jan.-March, 1989) 68-75.
- White, Shane, "It Was a Proud Day': African Americans, Festivals, and Parades in the North, 1741-1834," *Journal of American History*, 81 (1994) : 13-50.
- Williams, James, A, *Narrative of Events: Since the First of August, 1834, by, an Apprenticed Laborer in Jamaica* (Dover publication, 2015).

William-Meyers, A. J., "Pinkster Carnival: Africanism in the Hudson River Valley," in *Afro-Americans in New York Life and History*, vol.9-1 (January, 1985), 7-17.

大森一輝「『黒人史』の境界／『黒人』史の限界－アメリカ合衆国における黒人コミュニティ研究の動向を中心に」『西洋史学』197（2000年）。

笠井俊和『船乗りがつかぐ大西洋世界－英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』（晃洋書房，2017年）。

川島正樹編『アメリカニズムと「人種」』（名古屋大学出版会，2005年）。

清水忠重『アメリカの黒人奴隷制論－その思想史的展開』（木鐸社，2001年）。

田中きく代「公道の民主主義－19世紀アメリカの政治文化とパレード」田中きく代・阿河雄二郎編『「道」と境界域－森と海の社会史』（昭和堂，2007年）。

田中きく代・阿河雄二郎・金澤周作編『海のリテラシー－北大西洋海域の「海民」の世界史－』（創元社，2016年）。

肥後本芳男「アンテベラム期の印刷文化とアボリシヨニズム」日本アメリカ学会第4回年次大会シンポジウムA報告（愛知県立大学長久手キャンパス，2017年9月23日）。

——文学部教授——